

# 『北海道農業の課題と展望』に見る 『北海道農業発達史』



太田原 高昭 (おおたはら たかあき)  
北海道地域農業研究所顧問

1939年福島県会津若松市生まれ。68年北海道大学大学院農学研究科単位取得。北海道大学教授、同農学部長、北海学園大学教授などを経て、北海道地域農業研究所顧問。この間、日本農業経済学会会長、国土交通省田園委員会委員、北海道農業顧問、コープさっぽろ会長などを歴任。

### 農業基本法以降の50年を総括

このたび、4年がかりで取り組んできた『北海道農業発達史』を北海道地域農業研究所から発刊することができた。1963年に当時の道立総合経済研究所が総力を挙げて完成させた『北海道農業発達史』を引き継ごうというのが題名の意図である。『北海道農業発達史』は開拓以来の北海道農業の歴史をほぼ50年ずつ上下巻に分けてまとめたもので、それ以降の北海道農業の研究や政策立案のための基本文献となった名著である。

それからまた50年が経過した。1960年に農業基本法が制定され、いわゆる農基法農政が開始されてからの50年である。この間北海道農業にはかつてなかったような財政資金が投入され、農業の形も農村の姿も50年前には想像もつかなかったほどに一変した。一方で、農産物の貿易自由化の嵐が吹き、米の減反をはじめ、生産調整政策に苦しめられた。そして高い離農率と引き換えに府県に隔絶する大規模経営を実現した。

この波瀾万丈の50年をどう総括するか、というのが私たちに与えられた課題であった。この課題に答えるためには様々な視角がありうるだろうが、日本の中の北海道ということ意識すれば、この間に投下された膨大な国家財政に対して、北海道の私たちがどれだけのレスポンス<sup>\*1</sup>をすることができたかということが基本的視点とならなければならないのではなかろうか。北海道開発事業全体の総括はまた別の課題となるが、少なくとも農業開発に関して、北海道の人々がどれだけのものを築き上げたかが問われなければならない。

### 北海道農業の到達点の高さ

私たちはこうした問いに対して基本的に肯定的な答えを出すことができたと考えている。この50年間の北海道農業の到達点は、何よりも地域食料自給率210%という数字に現れているのではないか。国全体の39%という低い自給率をいかに高めるかということが今な

※1 レスポンス (response)  
反応、応答。

お国の農政の目標となっているはずであり、この目標をまじめに追求しようとするれば、北海道が数々の苦難の中でいかにしてこの金字塔を達成したのかを明らかにすることが、全国的に重要な意義を持つことになる。私たちは稲作、園芸作、畑作、酪農、肉用牛、養豚、馬産の各部門ごとにそのことをトレースしたので、その概要を記しておきたい。

稲作のサクセスストーリーはすでに多くの人の知るところとなっている。かつて「鳥またぎ」とか「猫またぎ」とか評された道産米が、いまや「ゆめぴりか」「ななつぼし」が食味において特A認定となり、30%台に低迷していた道内食率はついに90%に達した。複合経営として取り入れられた野菜も、全国一、二の産地に成長している。米の先行モデルであった新潟県が、近年は逆に北海道の水田農業戦略を学ぼうとしているのである。

畑作における最大の成果は4年輪作を確立したことであろう。『北海道農業発達史』の当時の北海道畑作は十勝は豆に、羊蹄山麓は馬鈴薯<sup>ほれいしょ</sup>に著しく偏った連作略奪農業だった。それが現在の甜菜<sup>てんさい</sup>-馬鈴薯-小麦-豆類という世界にも類のない合理的な輪作体系に変わったのは、早く見ても1980年代でそんなに昔のことではない。畑作物の価格支持政策と機械化の発達、そして基盤整備事業がそれを支えた。

酪農についてはまだ課題が多いが、一戸当たりの頭数規模や乳牛一頭当たりの搾乳量<sup>さくじょう</sup>はすでにEU諸国やカナダと比べても遜色<sup>そんしやく</sup>のない水準に達している。肉用牛や肉豚についてもその肉質評価は全国トップクラスに追いついている。馬産が北海道の独壇場であることは言うまでもない。

### 新たな展望を拓いた団塊の世代

このような高い到達点を築いたのは誰だったのか。私たちは「歴史の推進者」として行政、試験研究機関、農業団体、農業者の四つの主体をおき、それぞれの役割を明らかにした。行政はもとより、技術革新を主導

した技術者、産地形成を推進した農業団体などその役割は他府県に比しても大なるものがあるが、ここでは農業者自身について見ておこう。

私たちは団塊の世代に注目した。1950年前後に生まれたこの世代は、1970年ころ後継者となったとたん減反と生産調整に直面するという大きな挫折から出発した世代である。その前の世代が築いてきた規模拡大と大増産という「行け行けどんどん」の農業は完全に行き詰まった。その挫折と試行錯誤の中から新しい世代が作り上げたのが、うまい米や合理的輪作体系に代表される「量より質の農業」だったと見てよい。

北海道の特徴は、この世代の層が厚いことである。全国的には「昭和ヒトケタ」世代を頂点に農業就業人口が先細りになり、年齢別人口構成がキノコ型になることがよく知られているが、専業地帯である北海道では、団塊の世代とその次の世代、現在の年齢で50歳代と60歳代が多く、人口構成はツボ型になる。これこそが北海道農業の強みなのである。

全国的には、昭和ヒトケタ世代のリタイアとともに農業は担い手不足になり、TPP<sup>\*2</sup>があろうがなかろうが危機が到来するといわれているが、北海道は違う。北海道の農業者が築いた高い到達点とそれを支えるエネルギーの所在を確認するために、TPP推進派の人にもこの本を読んでいただきたいと思っている。



馬鈴薯畑と麦畑

※2 TPP (Trans-Pacific Partnership)  
環太平洋パートナーシップ協定。